

## 「学びの履歴」を確認する

### □ 前年度の指導計画を見て、「何を」「どこまで」学習してきたのか確認しましょう。

子供の知的障害の状態、入学前の生活経験の内容や経験の程度、興味や関心、対人関係の広がりや適応の状態等が一人一人異なっています。これらを考慮しながら、各教科に示された指導目標や指導内容の選定等、即ち指導計画の作成が行われるため、前年度の指導計画を見れば、「何を」「どこまで」学習してきたのかという「学びの履歴」を把握することができます。きっと、各教科において教科書をどのように活用すればよいのかというヒントが得られるはずです。



- 個別の指導計画や年間指導計画、学習プリント等を見て、これまで何を学習してきたのか、どこまでできているか、今、何を学ぶ必要があるのかなどを確認します。
- 今度の計画と必要な指導内容にズレが生じていることに気付いた場合は、再び実態把握を行います。
- 改めて実態把握を行い、指導目標を変更した場合、個別の指導計画も修正します。
- 個別の指導計画（評価含む）を引き継ぐだけでなく、指導記録を残すことで、次年度の担当教員が「学びの履歴」を把握しやすくなります。

## 体験的な指導内容の設定を検討する

### □ 生活に結びついた具体的な活動を学習活動の中心に据えて、実際的な状況下で指導し、子供の成功経験につなげましょう。

知的障害のある子供の学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しいことが挙げられます。そのため、実際の生活場面に即しながら、繰り返して学習することにより、必要な知識や技能等を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導が重要となります。

また、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが多いです。そのため、学習の過程では、子供が頑張っているところやできたところを細かく認めたり、称賛したりすることで、子供の自信や主体的に取り組む意欲を育むことが重要となります。

さらに、抽象的な内容の指導よりも、実際的な生活場面の中で、具体的に思考や判断、表現できるようにする指導が効果的です。

これらの教育的対応に加え、教材・教具、補助用具やシグなどを含めた学習環境の効果的な設定をはじめとして、子供へのかかわり方の一貫性や継続性の確保等の教育的対応や在籍する子供に対する周囲の理解等の環境的条件も整え、知的障害のある子供の学習活動への主体的な参加や経験の拡大を促していくことも大切です。

以上のことを踏まえて、体験的な指導内容を積極的に設定するとともに、子供の実態に応じて、教科書を用いた学習やプリント学習を効果的に組み合わせることが重要です。



### よく一緒に読まれている Q

- Q1 「教科の授業で、複数の学年の子供に対応するためにはどうしたらよいですか？」  
 Q3 「生活単元学習では、学習活動がマンネリ化しがちです…。」  
 Q18 「子供の実態に応じた教材・教具になっているか自信がありません。」